

令和7年度 名進研小学校自己評価

項目	方針	具体的方策	自己評価
重点目標	<p>「オンリーワンの挑戦」</p> <p>一中学受験指導を行う愛知県唯一の小学校として一</p> <p>①合格者数(東海中合格20名目標)</p> <p>②志願者数(200名目標)</p> <p>③新1年生(90名充足)</p>	<p>①深度の異なる習熟度別授業におけるきめ細やかな指導における基礎学力の定着と、進学塾名進研との連携強化による学力伸長、および個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実による主体的・対話的で深い学びの実現</p> <p>②イベントへの参加者増のため、SNS・WEB広告等での情報配信と、内容の充実</p> <p>③専願者に向けた受験アプローチと入試の複線化</p>	<p>中学受験では6年生全員が私立中学の合格を得た。東海中、南山中女子、滝中の重複を除く合格実数は前年を上回った。灘中、開成中など難関校に合格したものの、男子児童の学力を十分に伸ばしきれず、結果的に東海中を受験する数が減り、合格は8名にとどまった。女子は南山中女子(7名)と愛知淑徳中(24名)に過去最多の合格を出した。滝中合格は17名。県外受験が多かったのも特徴と言える。様々な募集活動に注力したが、志願者の減少に歯止めがかからず、2年連続で新入生の定員を確保できなかった。2年間実施したAO入試を振り返り、今後は受験する家庭の過度の負担を軽減し、入学後の成長と発達を期することを目的として、人物・動機・経験・経歴など多面的な観点を通し、本校の教育への適合性を審査するものに改善を図っていく。</p>
教務総務	<p>①基礎学力の定着と中学受験に対応できる学力の伸長を目指すとともに、各自の夢の実現に向けて、意欲的に実現できる精神力や行動力の育成を図り、思考力・判断力・表現力を育成する</p> <p>②ヒト・モノや実社会に触れる体験活動を実践する</p> <p>③探究活動を通し、主体的に問題解決を図る能力の向上と問題感知力を育成し、試行錯誤の活動を適用する</p> <p>④英語教育のさらなる充実を目指す</p> <p>⑤学校での活動や行事を通して承認場面を増やす。また自主的・自律的な子どもの育成を目指し、児童の自己有用感を高める</p> <p>⑥本校に合った「個別最適化」を検討する</p> <p>⑦道徳(人権)教育を推進する</p> <p>⑧保護者が参加する行事(保護者会等)について、子どもの教育を充実させることを目的とし、保護者と教師の連携が深まり、家庭教育が充実する情報を発信する</p>	<p>①日々の宿題の提出を促すとともにきめ細やかな宿題指導を行うことにより、基礎学力の定着を図る。また、定期テストに適性検査型問題を入れることにより思考力・判断力・表現力を育成する</p> <p>②体験的な学習を取り入れ普段とは違う経験をさせることにより、豊かな心の育成をする。サマースクール、出前授業、校外学習といった機会を活用する。サマースクール中の出前授業設定可能日程を各学年に早い段階で提示することによって、学年の出前授業の充実を図る</p> <p>③教育研修と連携し総合的な学習「プロジェクト」を通して新たな形を検討する</p> <p>④「聞く」「話す」だけでなく、「読む」「書く」を各授業で充実させるために、個にあった習熟度別クラスへの展望を描く</p> <p>⑤キャリアパスポート充実の継続。各行事で児童には反省を書かせ、フィードバックとして保護者にもコメントを書いてもらう。承認場面を増やし児童の自己有用感を高める</p> <p>⑥学習の個別最適化の検討として、児童が自身の課題に気づき、その課題を解決していくような方法の構築を検討する</p> <p>⑦道徳の授業や体験活動を通して、心の成長を図る</p> <p>⑧保護者会、学級懇談会を通して、児童の様子や学年方針を伝えることにより、家庭と連携する機会を設ける。行事がスムーズに進むように枠組みを提示する</p>	<p>今年度は、S授業や宿題の実施方法について、生活指導係の引き継ぎ資料を基に各学年の実態に応じて適切に運用することができた。また、定期テストに適性検査型問題を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育成するとともに、事後解説を通して基礎学力の定着を図った。サマースクールでは昨年度と同等の出前授業を実施し、各学年の学習内容に沿った体験的な学びを提供することができた。総合的な学習では、教育研修が大枠を示し、各学年が計画した内容を通して児童が探究的に学ぶ機会を確保した。6年生の中学準備講座では習熟度別の指導を行い、個に応じた学習機会を提供したことで、上位層には発展的なアウトプット、平均層には基礎定着を図ることができた。キャリアパスポートは保護者コメントの活用により児童の自己有用感の向上にもつながった。一方で、個別最適化の方向性の共有や英語科教員配置、出前授業規約への対応、保護者会の参加率向上などに課題が残った。今後は「自律S」の検討や係間連携を進め、本校に適した個別最適化の在り方を明確にし、より効果的な教育活動の実現を目指していく。</p>
入試広報	<p>①各種イベントに目的をもたせ、認知度の向上を目指すとともに、信頼度・安心感のさらなる向上を目指す(ブランド力の向上とファンの醸成)</p> <p>②本校に合った入試制度を確立する</p> <p>③ホームページやInstagramによる情報発信等のさらなる充実を目指す</p>	<p>①信頼度・安心感の向上をはかれるイベントの立案</p> <p>②本校のアドミッションポリシーに合った入試内容の確立</p> <p>③より学校の雰囲気がわかる情報発信</p>	<p>今年度は新規イベントとして、7月に「年長入試体験会」、11月に「わくわくスタディプログラム」を実施した。いずれも参加者アンケートでは非常に高い評価を得ることができ、特に「わくわくスタディプログラム」は人数限定の企画が即日で定員に達するなど、高い関心が見られた。一方で、従来から実施しているイベントは満足度が高いにもかかわらず、参加人数は昨年度を下回るものも多く、募集段階での工夫が課題として残った。次年度以降はイベント内容の精査に加え、Instagramの活用など広報段階の改善を進めていきたい。また、入試については、本校のアドミッションポリシーに基づきAO入試と一般入試を実施したが、両者の内容の差別化が十分とは言えなかった。次年度以降は入試内容の役割を明確にし、市場への認知を高めていく必要がある。さらにInstagram運用では、リアル投稿の継続やサムネイルの統一によりフォロワー数は年間200名以上増加したものの、フォロワー増加がイベント参加者数の増加に直結しない課題が見られた。今後は外部層への訴求を意識した情報発信を強化し、志願者増につなげていきたい。</p>
教育研修	<p>①生きる力につながる21世紀型能力を育むカリキュラムマネジメントを推進し、授業力・指導力の向上を図る</p> <p>②教務総務と連携し、本校に合った「個別最適化」を検討する</p> <p>③教務総務と連携し、調べてまとめるだけの探究活動ではなく、本校に合った試行錯誤の活動を含む「探究活動」を検討する</p> <p>④情報モラル教育と教育の質を向上させるICT教育の研究と推進を図る</p>	<p>①21世紀型能力を育むための主題を設定し、主題を意識した授業とどのように主題を各教科で取り入れるのかを考える研修の実施をし、授業力・指導力の向上を図る</p> <p>②学習アプリの検討。児童の学力が向上する学習アプリ(無料・有料)を探し、月に1回係会で検討、選定する。さらに教務総務とも検討し、導入していく。導入後は、児童にポスターなどで新規アプリが入ったことを広告する</p> <p>③探究活動を取り入れた学習の実施</p> <p>④児童の情報活用能力を育成するための授業を実施</p>	<p>主題を「個別最適な学びと協働的な学びから、学びを深める児童」とし、総合的な学習の時間「プロジェクト」において、低学年では調べ学習、高学年では探究学習を実施した。主題を意識した授業では、児童の探究心や粘り強さ、情報収集力の向上が見られた。また、保護者を招いた発表会やイベント、協力して絵本を制作する活動など、明確な目標を設定した学習を行うことで、主体的に学習へ向かう態度を育成することができた。一方で、これらの成果を各教科へ十分に還元するまでには至らず、今後の課題として残った。ICT教育の推進では、プログラミング教材に加え、ロボット教材embotやゲーム感覚で学べるアプリの導入を進め、令和8年度から運用を開始する予定である。また、2030年の新学習指導要領を見据え、生成AIやタイピングなど「情報」領域の学習を先行的に取り入れていく。情報モラルについては道徳科を中心に実施したが、計画的な実施に課題が見られた。さらに、Monoxerの運用停止や学習アプリの選定にも課題があり、今後は代替アプリの検討と計画的な導入を進めていく。</p>
生活指導	<p>①教師が率先垂範し、子どもの模範となる</p> <p>②複眼的かつ多面的な角度で子どもを捉え、実態を把握し、指導にあたる</p> <p>③規律を守り望ましい生活習慣の確立と異学年交流や同学年交流を通し、適切な人との関わり方を醸成する</p>	<p>①教職員による児童心得や学校生活の約束事の共通理解を深める(理由を明確にする)、教師や児童の定着に結び付ける</p> <p>②生活指導の3つの部署の視点を深め、学年や児童の発達に沿う指導や環境整備を行う</p> <p>③交流給食のみならず、委員会活動による交流〇〇の活性化や教育活動を通じて異学年との関りをもつ活版充実</p>	<p>本年度は、教師が率先垂範して児童の模範となること、児童を複眼的・多面的に捉え実態に応じた指導を行うこと、規律ある生活習慣の確立と異学年交流を通じた人間関係づくりを柱として生活指導を進めた。教職員間で児童心得や学校生活の約束事について共通理解を図り、その背景や理由を明確にした指導を行うことで、指導の方向性を統一し、児童の生活規律への意識向上につなげることができた。また、生活指導に関わる各部署が連携し、学年や発達段階に応じた指導や環境整備を行うことで、児童の実態に即した支援を行うことができた。さらに、交流給食や委員会活動などの機会を通して異学年交流を促進し、上級生が下級生を思いやる姿や互いを尊重して関わる様子が見られた。一方で、生活背景や価値観の多様化に伴い、望ましい生活習慣の定着には継続的かつ組織的な指導が求められる。今後も教職員間の共通理解を深め、児童一人一人の実態に応じた支援を行いながら、主体的な規範意識とよりよい人間関係の育成を目指していく。</p>

令和7年度 名進研小学校自己評価

<p>野外活動室</p>	<p>①学習プログラムを再構築し、ポニー倶楽部のさらなる授業充実を図る ②厩務員個々のスキルアップを図り、授業の質を向上させる ③新規事業を提案する</p>	<p>①ポニー倶楽部の授業充実のため、以下3点を具体的方策とします。 ・これまで馬のサイズで学年別に配馬されていたカリキュラムを見直し、馬の性格・能力から適性学年を決め、配馬します。そのため低学年でもやや大きい馬を使用します。 ・今年度より、赤旗時の室内活動を見直します。そのための教材作り等を、年間を通して実用しながら進めています。（授業・サマースクール・放課後プログラム） ・職員数が増えることから、騎乗時間外の室内ワークや厩舎作業を見直し、新しいプログラムを作成します。（プリント・馬の手入れなど） ②新入職員2名を迎えていることから、まずは職員の乗馬の練習を充実させます。そのためには常に乗馬練習できる馬の確保の観点から、職員全体で6頭の運動をコンスタントに行います。乗馬技術の上達が授業の充実に直結すると考えます。 ③新規事業の提案をします。放課後プログラム2日目の開講と卒業生向けのプログラムの企画を進めます。</p>	<p>本年度は、ポニー倶楽部の授業充実に向けて方針に基づいた取り組みを進めることができました。配馬については体格ではなく児童の適性に応じて見直しを行い、より安全で効果的な活動につなげることができたため、次年度も継続していく。また、天候等により屋外活動が難しい場合に備え、高学年向けの座学資料やプリントを作成し、赤旗時でも学びを止めない体制を整えた。さらに、放課後やサマースクールでも活用できる室内ワークを作成し、活動内容の充実を図った。新入職員2名への乗馬指導については、人員増により6頭すべての運動を安定して行うことができ、放課後の技術的トラブルの減少という成果が見られた。一方で、馬のけがや体調不良により十分な個別指導が難しい場面もあり、限られた頭数の中で職員の技能向上をどのように図るかが課題として残った。加えて、新年度から放課後プログラムの講座を月曜日に増設した。今後は講座運営を安定させるとともに、厩務員全員が担当できる体制づくりを進め、より充実した活動の実現を目指していく。</p>
<p>1年</p>		<p>①年間計画の主題にプロジェクト活動を取り入れ、語彙や知識の獲得、読解力や思考力を高める。調べたものをまとめたり、つくったものを発表したりすることで、自己表現の方法や経験を身につける。また、交流活動を通じて、事前に計画を立てたり準備したりする機会をつくる。周りの人（他学年の児童や保護者、教師など）のために、自分にできることを考えたり、行動に表したりできるようにする。つくる、さわるなどの体験活動を通して、知識の定着や新しい気づきを得る機会をつくる ②学習活動から、自主性をもって活動に取り組む習慣を身につける。自分のことは自分でするように、授業で取り組み方について段階的に指導する。けテぶれで、課題や目標を設定したり、成果をふりかえったりして、自学自習の技能を身につける。ノートのとり方についても、授業で提示して共通理解を図る。また係活動から、自分の役割に責任感をもったり、他の児童と協働して取り組んだりできるようにする</p>	<p>本年度は、教員間で共通理解を図り、学習規律や生活習慣の指導を継続的に行うことで、児童が落ち着いて学習に取り組める環境を整えることができた。読み書きの基礎定着に向けて反復練習の機会を設け、漢字や計算、アルファベットなどの個別指導を行い、2年生につながる基礎づくりを進めた。また、例年通り学年目標をプロジェクトの活動内容と関連付け、調べ学習を通して語彙や知識を広げ、読み書きの力を高める機会を確保した。出前授業や校外学習では専門家との関わりや実物に触れる体験を取り入れ、児童の興味関心や理解を深めることができた。特に今年度は交流活動に重点的に取り組み、事前準備を含めた探究的な学習を実施したことで、主体性や協調性、責任感の向上が見られた。さらに、他教科と関連付けた横断的な学習を行うことで、数の理解や作文、発表、情報活用、工作など、学んだことを多面的に活用する力を育成することができた。</p>
<p>2年</p>	<p>①自発的・自主的な活動を大切に、体験学習を重視する。見る、聞く、調べる、遊ぶ、育てる、作るなどの具体的な体験活動を通して、体験に基づいた知識を身につける ②学力の基礎をしっかりと構築し、授業や宿題にきちんと取り組む学習習慣や、学校や家庭での生活習慣を定着させる</p>	<p>①自発的・自主的な活動につなげるためのモラル教育を実施する。具体的には、道徳や学活、校外学習の場を活用し話の聞き方・移動の仕方・施設の使い方などの基礎を身につけさせる。グループ活動の活性化と役割の明確化として、多くの学習でグループワークを実践させる。かならず役割を決め、その役目を果たそうとすることで、自身がその集団においてかけがえのない存在であることを実感させる。整理整頓の習慣化として、整理整頓の時間（朝・昼・帰り）を決めることで、常に整頓した環境で学習させる。生活習慣を観点として学年でレクリエーションを開催するとして、学年全体で正しい生活習慣を定着させていくために、同じ目標を掲げ、それに向けて個々および集団で達成しようとする機会を設けたい。たとえば体操服袋積み上げ大会（体操服をきちんとたたんでいないと、高く積み上げられない）など。遊び感覚で、楽しく生活習慣を整わせていきたい。学活の時間を有効活用として、学習フォローと里山遊びを軸にして、学年で知育体育を実践する。学年で同一のことは実施することで、クラス間の不平等感をなくすことと複数教員でのフォロー体制を整える。ミニ運動会の実施（前期：7月/後期:12月）を通して団体競技を通して、仲間と協力する大切さを学ぶ ②ノートを教師がチェック→良いノートのとり方を紹介。漢字反復によって基礎学力を固め、計算力と漢字力を伸ばし、その成果を国語・算数の授業へとつなげる</p>	<p>本年度は、教室移動時の整列について継続的に声かけを行うとともに、遠足や社会見学の事前指導を丁寧に行ったことで、施設や一般の方に迷惑をかけることなく校外学習を実施することができた。プロジェクトでは、里山で拾ったどんぐりを育て観察する活動を行った。結果として十分に育てることはできなかったが、失敗の原因を考えようとする姿が見られ、探究的な学びにつなげることができた。また、ミニ運動会を2回開催し、主屋ごとに協力する姿が見られたほか、2年生名進研グランプリでは発表者が人前で伝える経験を積み、観覧者も発表を聞く態度を学ぶ機会となった。学習面では、朝学で算数の100マスプリントに取り組むことで落ち着いて朝の会を始める習慣が身についた。さらに、担任による宿題確認とノート指導を継続したことで、丁寧にまとめる児童が増加した。1年間の継続的な指導により、授業中の離席や私語が減少し、学習に向かう姿勢の向上が見られた。</p>

令和7年度 名進研小学校自己評価

<p>3年</p>	<p>①基礎学力の定着の徹底を図るため、テストを指標とした復習を行い、確かな知識の習得を図る ②思考力や応用力をつけていくために、発展的学習にも積極的に取り組む</p>	<p>①☆基礎学力の定着→学活で週に1回、漢字反復で計算力アップ、漢字書き取りの強化を図る。授業ノートを添削しノートのとり方を指導する。宿題ノートのチェックから、児童の家庭学習状況を把握、課題を分析し家庭と連携しながら改善を図る。算数のS授業で個別サポート態勢をとるため、計画に人員を配置する。授業で習熟度を高め、児童の家庭学習や教員や保護者がフォローする負担を軽減させる。以上から個別最適な学びを追求する。☆実力テスト対策→結果を分析し弱点単元のフォロー計画を立て、家庭と連携しながら実践させる。3年生カリキュラム最終の2月実力テスト、4年生カリキュラムの初回3月実力テストでは、偏差値60以上20名(学年の25%)、偏差値50以上35名(学年の70%)を目標に、段階的に底上げしていく ②☆コアマスターの効果的活用→学園アフター校と連携を図りながら受験指導を行う☆プロジェクト学習→調べ学習のサイクルのなかで、個人で得た知識をグループで共有しまとめたり発表したりすることで協働的に学びを深める。また、実体験(出前授業や校外学習、社会見学など)する機会を設け、見識を拡げ発展的な学習にふれる☆理科・社会→学び始めの1年として、教室での学びから教室外の学びを意識的に実践する。学校の資源(人材、校内施設、里山などの自然)を最大限に活用する。学ぶ楽しさを実感させながら、受験内容を学習していく ③協働活動☆グループワーク強化→日々の生活や活動から班で活動する機会を増やす。班にリーダー、副リーダーの役割を与え、メンバーのことを考える、まとめる、サポートする意識を高める ☆学年協働→学校行事では学級を超えたグループでの取り組み。 ☆保護者と協働→保護者と協働で学年イベントを実施。保護者満足度の向上から口コミへ、転入生3名獲得へつなげる。</p>	<p>本年度は、基礎学力の定着を重視し、音読や群読による表現力向上、漢字指導やノートづくりの徹底、朝学習用のオリジナル教材による計算力強化に取り組んだ。学習履歴を記録し振り返りを行うことで、児童の意欲向上と粘り強く取り組む姿勢の育成につながった。算数S授業ではサポート教員による個別支援やコース別学習フォローを行い、達成感を得ながら学力向上を図った。実力テストでは多くの児童が標準以上の水準に到達し、基礎力の底上げが見られた。思考力・応用力の育成では、プロジェクト学習を中心に体験活動と関連付けた学習を行い、調べ学習やまとめ活動を通して学びを深めた。里山での特別授業や社会科の体験活動、ディベートの導入により、多面的に考える力や対話力を養うことができた。協働活動では班活動や役割分担を取り入れ、協力して発表資料を作成するなど協働的な学びを推進した。発表会や学校祭を通して達成感や自信を育むことができた。一方で、学習サイクルの確立や週テストを活用した自律的な学習習慣の形成、協働に必要なコミュニケーション能力の育成には課題が残った。</p>
<p>4年</p>	<p>③ 協働活動を伴う行事を通して人との関わり方を醸成する</p>	<p>①基礎学力を定着させるため、毎朝朝学として計算や単位換算などの反復を行うとともに、学活を利用して学年で学習フォロータイムを設け、授業だけで理解できないところを減らせるようにする。各教科でも、反復学習を行い、定着できるようにしていく。(例:英語は多読教材を使い、単語力や文章読解力を養いJET対策。算数は冒頭に小テストを行い、直近の授業内容の定着。理科は復習テストの結果と実力テストの結果の関係性を見ていく。国語は読解の基本のポイントを押さえることを意識した授業を行う)また、S授業のS3を30名未満にして、きめ細かい指導を行いボトムアップを図る ②思考力・応用力として、他教科とのつながりや公立一貫校の問題形式に対応した定期試験の問題作りを行う。プロジェクトの学習「つくる責任・つかう責任」について、調べ学習だけではなく、道具を作るなど実際の活動を通して考えていく(例:理科でへちまを栽培して、へちまでたわしを作り、既製品のたわしと天然の手作りのたわしの比較。Tシャツで手作りのエコバッグと既製品のエコバッグの比較)。また、現状の問題点として表面的にしか考えられない児童や自分の意見が書けない児童が多い。授業では思考力を養うため、他の児童の意見を元に、同意したり反対したりしながら協働的な学びを通して思考を広げていく ③人との関わり方を醸成するために、宿泊学習をはじめ、学校生活の中にグループ活動を積極的に取り入れ、常に集団を意識することにより、他人との関わり方を学ぶ。現状:トラブルになった時に自分の意見を通そうとして、折り合いをつけられない。学年目標も「心ひろげる」を達成するためにも、うまくいかない時ほど、どのようにしたら良いか子どもたちで解決策を考えさせる</p>	<p>本年度は、算数の基礎力向上を目的として朝学と学習フォローアップタイムを実施し、反復学習の機会を確保した。前期は算数を中心に取り組み、Sテストにおいて偏差値45未満の児童を35%から10%台へ減少させるとともに、偏差値60以上の児童も増加するなど一定の成果が見られた。一方で登校時間の都合により全員が参加できないことや、後期にフォローの機会が減少したことで下位層の割合が再び増加するなど課題も見られた。また、少人数でのS3授業では学習意欲の向上が見られた一方、理解の定着に差が生じ、学力の二極化が課題として残った。理科とプロジェクトの横断的な学習では、SDGsの観点からエコバッグ作りに取り組み、原材料に着目した調べ学習や協働学習を通して思考を広げることができた。定期テストでは長文読解力の課題が明らかとなり、日常の指示理解を含めた継続的な指導の必要性が示された。人間関係の面では、グループ活動や宿泊学習の係活動を通して役割意識が育ち、子ども主体で考え行動する姿が見られるようになった。</p>

令和7年度 名進研小学校自己評価

<p>5年</p>	<p>①受験を意識した内容の濃い授業や進学塾名進研との連携を行いながら、基礎学力に基づく、応用的・発展的な高いレベルでの力を身につけ、志望校合格を目指す</p> <p>②自律的に学習に取り組む姿勢を養う</p> <p>③上級生としての自覚と節度ある生活習慣の確立、卒業後も社会のリーダーとなれるよう、積極的に周囲の状況や他者の気持ちに寄り添える主体性と協調性のある児童を育成する</p>	<p>①受験を意識した内容の濃い授業や進学塾名進研との連携を行いながら、基礎学力に基づく応用的・発展的な高いレベルでの力を身につけ、志望校合格を目指す②自律的に学習に取り組む姿勢を養う</p> <p>学習面</p> <p>①、②は重複するものをあるので合わせて記載</p> <p>4年生時の取り組みとしてSクラスの数割り振りの工夫、算数S授業の小テストなどを実施してことで2月実施の実力テストでは60以上22名（約23%）40以下9名（約9%）となったことから、学力の定着はできていたと考えられる。今年度はさらなる学力の伸長を目指すための手段として宿題の提示の仕方に変化をつけている。以前はM・portalでアップのみであった宿題の一覧をプリント配付し、チェックリストをつけた。そのプリントを毎回ファイリングできるよう児童にファイルも配付し管理しやすい環境を作っている。また、宿題に使うノートを一冊にすることで管理しやすくし、教員も煩雑なノート管理にならないようにして管理しやすくした。児童が教科ごとにできているものをチェックすることで小さな達成感を持たせ、学習意欲を高め、自律的に学習を進める手だてにしたい。また算数では算数の達人をS授業の冒頭で取り組みせ、計算トレーニングを毎日の宿題で出すなど新しい取り組みも始めている。また、夏期、冬期講習など学年が上がるにつれ欠席者が増える傾向にある。理由として他塾の講習を受けるということが挙げられる。昨年度の実績の中で最後まで小学校とアフター校のみで学習に取り組めた子の第一志望合格率が高いことから、一つの学習環境で継続して学習に取り組む有益性については実証されている。よってサマースクールの出席率や冬期講習の出席率を高くしていくことが再来年度の合格実績に直結していく重要な要素となると考える。その手立てをして進学ナビのようなイベントや実力テストの解説などを実施できる時間を確保することで「学校だけでも大丈夫」という意識を持たせたい。思考力の育成については引き続き定期テストなどで色々な問題を作成していくとともにプロジェクトを通じて「調べればわかること」から「考えなければわからないもの、考えても明確な正解がないもの」について、出前授業や宿泊学習などを通してじっくりと取り組みせたい。</p> <p>③上級生としての自覚と節度ある生活習慣の確立、卒業後も社会のリーダーとなれるよう、積極的に周囲の状況や他者の気持ちに寄り添える主体性と協調性のある児童を育成する。高学年になり、委員会や主屋、通学班などそれぞれの場面でリーダーとしても立ち振る舞いが求められる。特に主屋活動でリーダーとしての役割を多く担うことになるので、この機会を上手に活用していきたい。6年生が引退する前期の内容でも七夕、スタンブラリーなど5年生が中心となり主屋の教室で何をするかを考えて進めていく行事があり、その中で学年では協力して物事を進めていく姿勢を、学校全体では自分達だけではなく全員が楽しむためにはどうすればよいのかを考えさせ、他者を思いやる心を育てていきたい。また、宿泊学習での猿島の活動で一つのものをグループで作成することもそのような心をはぐくむよい機会として使いたい。また教員側は児童が行事などで付けた自信をしっかりと認め、褒めることで自己肯定感を高めていく。学年集会での先生賞の表彰や、学校外の活躍がわかるものも積極的に持ってこさせ表彰をしていく。4月に児童に行ったアンケートでの結果では「受験生なのだから」「上級生なのだから」という言い方をされることに抵抗を感じる児童も少なからずいることがわかった。義務感から動くことよりも自発的に何かをすることに対して特に褒めるように学年で取り組んでいく</p>	<p>宿題の提示方法に工夫を加えたことについては、面談等を通して保護者から一定の評価を得ることができた。一方で、学習内容の高度化や量の増加に伴い、特に成績中位から下位層の児童において宿題を十分に提出できない状況も見られた。すべてに取り組むことが理想であるが、実態として難しさもあるため、来年度は週テストの導入も踏まえ、児童自身がPDCAサイクルを意識しながら主体的に学習計画を立てられるよう支援していく必要がある。宿題提出ノートの一冊化やファイリングの工夫により、学習状況の把握や確認の効率化を図ることができた。また、サマースクールや冬期講習の参加率は9割近くとなり、学習機会の確保という目標は達成できた。生活面では、主屋活動や委員会活動、オープンスクールなどにおいて学校を支える中心学年として主体的に行動する姿が見られた。児童会選挙にも多くの立候補があり、学校をより良くしたいという意識の高まりが感じられた。一方で、児童の人間関係に様々な問題が生じたことを大きな課題と受け止め、安心して学校生活を送れる環境づくりのために、より丁寧な見取りと早期対応を行う必要性を痛感した。</p>
<p>6年</p>		<p>①昨年度の経験から、良い部分は取り入れ、改善できる点は今年の6年生の子どもたちの実態に合う形を探していく。すべて同じことをやるのではなく、ベースとして考え、今年の子に合う形でS授業、宿題を実施していく。日ごろから、日々の様子、各教科の情報を共有し、必要であればすぐに実態を確認し、改善を行う。また昨年に引き続き、アフター校受講者も多くいるため（5月時点39名）、アフター校の先生方とも情報共有できる機会を作る。学校の重点目標である東海中学校20名達成するために学年団で密に情報共有をはかり、より良い環境づくりのために適宜話し合いを行い実践していく。そして一人でも多くの志望校合格を目指す。</p> <p>②昨年に引き続き、最低週1回、学年合同の個別学習タイム&質問タイムの時間を確保する。自分の目標に合った形で集中できる環境づくりを行う。ただ、学習させるだけにならないよう、机間巡視等を行い、声をかけていく。また、その時間を利用して、結果や目標について話をする時間を作り、コミュニケーションをとり、個別の状況把握をしできる限りの個別最適化を目指す。</p> <p>③学年目標を「応援される人になろう」と設定した。最上級生として、名進研小学校生の代表という意識を持たせ、たくさんの人から応援される人を目指す。そのために、①何事にも全力②相手の気持ちを考える③様々なことを守ることを学年のルールとした。学年集会で先生賞を表彰したり、良い行いをした子は積極的にほめたりと、承認される機会を増やしていく。</p>	<p>本年度は、10期生での指導の流れを踏まえて教育活動を進めたが、11期生の実態に十分対応しきれなかった点が課題として残った。生活面での指導に多くの時間を要し、日々の学習状況の共有や個別の学習支援が十分に行き届かなかった結果、志望校合格に向けた具体的な支援に差が生じてしまった。学用品のルール遵守など生活面の課題も見られた。学習面では、週1回ランチルームで自習時間を確保したことで大きな混乱はなく、継続して努力した児童は成果につながる傾向が見られた。今後は自習時間をより効果的に活用するため、担任だけでなく教科担当も関わり、個別の学習内容を明確にして支援する体制が必要である。また、「応援される人になろう」を学年目標として取り組み、何事にも全力で取り組む姿は多く見られたが、相手の立場を考える行動や規範意識の定着には課題が残った。一方で、個別の働きかけや称賛を通して大きく成長した児童も見られ、意欲を引き出すための肯定的な関わりの重要性が再確認された。</p>